

太夫

〔賤者考〕惣嫁、江戸にて夜鷹か目をつかむは夜のみ出ると、鷹といふは鳥といふは、や、古くは立君といひ、江戸にて切店女といふべきを辻君といふ、是をもかへざまに夜鷹を辻君と思ふは、辻といふ稱を心得誤れるなり、往來の辻よりたゞちに見ゆべく、端近く出ゐるによりて、辻君とはいふなり、たゞちに辻にゐるにはあらず、此二種のさま、七十一番職人歌合の繪にてさとりべし、

〔異本洞房語園上〕京都遊女の名目

太夫　これは藝の上の名也、慶長年中迄、遊女ども亂舞を習ひ、一年に二三度づ、四條河原に芝居を構へ、能太夫、舞太夫、皆けいせいども勤めし也、尤大人歴々の御方御見物あり、種々の餘情花麗なる事ども多かりしと也、去によりて今日の太夫は、誰が家の何といふ太夫が勤るなど、いひしより、おのづから、よき遊女どもの總名となりけるよし、芝居相違なく仕舞候得ば、太夫の遊女どもは、町御奉行所へ御禮に上る、此例により、今以て年頭八朔、兩度づ、御禮に上り申候、

〔嬉遊笑覽九娼妓〕

元文頃まで太夫有しは、三浦屋三軒と玉屋のみなり、徒流云、元文五年頃迄、揚屋五

軒あり、尤揚屋町にはなし、新町に京町二丁目なれど、いつの頃より海老屋治右衛門、尾張屋清十

郎、橋屋五郎、左衛門、若狹屋庄三郎、京町和泉屋清六、其後揚屋ども皆破壊して、尾張屋清十郎のみ

揚屋町へ轉宅して榮へたり、三浦ハ寶曆六年接るに、金多里といふ細見寶曆の初年、江戸町一丁

め、玉屋山三郎に太夫花紫、これ一人、揚やは尾張屋清十郎のみなり、太夫も揚屋も此已後絶たり

〔傾城歌三味線一〕上手をいふていやな座敷を

夷中に京あり、三國の出村にて名高き小女郎といへる、太夫職は、吉原の三浦が抱へ、前の握虎高尾といふ太夫から、つり取るべき器量風儀、まかし情有つて、大氣に生れつき、自然と松の位に備つて、衣裳好く著こなし、道中外の女郎と替り、少しすしに見へて、幅のなき男は恐れて會ふ事稀なり。